

## 絵巻の往き来に見る室町時代の公家社会

—その構造と文化の形成過程について—

木原 弘美

はじめに

伏見宮貞成親王は、その生涯の中で公家社会の表と裏を経験した人である。<sup>(1)</sup>後小松・称光天皇の後光厳院流の世の間は、崇光院流の嫡流として、伏見御所で生活していた。称光天皇の崩御の後、貞成親王の王子彦仁王が即位すると（後花園天皇）、天皇の実父として世間の注目を集め、一条東洞院邸に移り、公家社会における伏見宮家の地位を安定させた。

貞成親王の生活の変化を見てゆく方法のひとつに、文化の活動の実態を解明することがある。貞成親王の文化の活動として広く取り上げられているのは、年中行事、茶、和歌、連歌会、猿楽等の芸能の鑑賞である。<sup>(2)</sup>だが、それらは貞成親王を中心とする、伏見宮家の中での活動が主であり、外部との接触は余りみられない。

貞成親王と公家社会の関りを文化の面からみるためには、外部と接触のある文化事象をその対象に選ぶ必要がある。これに該当するものは、貸し借り等を通して動くもの、書籍、絵画、楽器等の文物である。<sup>(3)</sup>特に絵巻は個人で所蔵し

たり、他との往き来を通して鑑賞の機会を増やしてゆくものである。よって、貞成親王の絵巻の往き来の実態を明らかにし、公家社会の中で絵巻の往き来が果たした役割について考えてゆく。そして、室町時代の公家と文化についての見通しを立ててゆくことにしたい。

尚、本稿で用いる史料は、貞成親王の『看聞御記』と中原康富の『康富記』である。<sup>(4)</sup> 中原康富は、貞成親王の王子貞常親王の家庭教師であった。『看聞御記』の欠けている年の伏見宮家の絵巻の活動が記されているので、伏見宮家関係者から見た絵巻の活動をみるができる。

### 一、貞成親王の関った絵巻について

ここでは、貞成親王の許に集まってきた絵巻について見てゆく。

貞成親王の絵巻に関する活動は、資料(一)からも明らか様なに、三つの時期に大別することができる。

一、応永二十三(一四一六)〜正長元(一四二八)年は、後花園天皇の即位前の、伏見御所が貞成親王の生活の中心であった時期である。<sup>(5)</sup> この頃の貞成親王の許に集まった絵巻は三点である。<sup>(6)</sup> そして、この三点とも、伏見宮家の宝蔵絵や、貞成親王の血縁者の縁故による提供であり、<sup>(7)</sup> その提供者が伏見宮家及びその関係者に限られている。また、資料(二)よりこの時期は、唐絵・障子絵・屏風絵等に関する活動が、絵巻に関する活動と比較すると充実している。よって、この頃の貞成親王の絵画鑑賞は、唐絵・障子絵・屏風絵等が主な対象であったといえる。

二、永享元(一四二九)〜嘉吉三(一四四三)年は、貞成親王が後花園天皇の実父として、公家社会の中で一目置

資料(一) 貞成親王の関つた絵巻一覽表

年月日	絵巻名	数	種類	備考
『看聞御記』 応永二三、 三〇、四、一三 三三、一一、四	一口物語絵 伏見宮家宝蔵絵 常磐絵	二卷 二篇	物語 雑 御伽草子?	
永享 三、三、二三	十二年合戦絵 後三年合戦絵 弥益大領絵 七天狗絵 長谷寺縁起絵 勝尾寺縁起絵 八幡縁起絵 宝篋印陀羅尼絵 繪 正安朝觀行幸絵 小繪 五節絵	五卷 六卷 三卷 七卷 三卷 四卷 二卷 二月 十卷 一卷 一卷 三卷	戦記 戦記 雑 社寺縁起 社寺縁起 社寺縁起 社寺縁起 社寺縁起 社寺縁起 社寺縁起 社寺縁起 社寺縁起 社寺縁起 社寺縁起 社寺縁起 社寺縁起 社寺縁起	勸修寺縁起              禁中公事等十二月之事 高倉院承安元年五節絵
永享 四、五、二三 九、六、一 六	小繪 唐使図・御賀絵 年中行事絵	數卷 兩卷	雑 記録 記録	
永享 五、六、一二 一四 一六	弘法大師絵 智証大師絵 太神官法樂寺絵 泊瀬寺縁起 八坂法觀寺塔縁起絵 聖廟御絵	十卷 五卷 三卷 三卷 三卷 六卷	高僧伝 高僧伝 社寺縁起 社寺縁起 社寺縁起 社寺縁起	

<p>永享 六、三、二四</p> <p>七、三 二〇</p>	<p>義湘大師絵 青丘大師絵 新善光寺絵 玄莊三蔵絵</p>	<p>四局 二卷 三卷 二卷</p>	<p>高僧伝 高僧伝 社寺縁起 高僧伝</p>	
<p>永享 七、五、九</p> <p>一〇、二五 一一、八 一二、六</p>	<p>源氏絵 墨過絵 大嘗会御禊行幸絵 八幡縁起絵</p> <p>粉河観音絵 書写上人絵 犬頭糸絵 伏見宮家宝蔵絵 粉河観音縁起絵 行幸賀茂祭・檢非違使檢断等絵 悪源太絵 鎮西追討絵 若法師児絵</p>	<p>三卷 五卷 七局 六卷 上下 三卷 三局</p>	<p>社寺縁起 高僧伝 雜 社寺縁起 記錄 戰記 戰記 記錄</p>	
<p>永享 八、五、一九</p> <p>三〇 六、二五 七、四</p>	<p>善光寺利生絵 修驗道絵 保元絵 平治絵 足引絵 狭衣絵 高大夫絵等</p>	<p>二局 一卷 上中下 五卷 五卷 兩三卷</p>	<p>社寺縁起 經說 戰記 戰記 御伽草子 物語 御伽草子</p>	<p>繪 粟田口隆光</p>
<p>永享 九、一、二七</p> <p>五、一五 六、八</p>	<p>源氏絵 融通念仏絵 愚童記絵</p>	<p>二局 兩三卷</p>	<p>物語 社寺縁起 社寺縁起 社寺縁起</p>	

<p>一〇、 八</p>	<p>平治繪 定智真筆繪 因果繪 慈惠大師繪 地藏繪 關白出仕繪</p>	<p>二卷 二卷 三卷 三卷 六局 一局</p>	<p>戰記 雜 經說 高僧伝 社寺縁起 記録</p>
<p>永享一〇、 五、 一六、 二四、 二六、 六、 八</p>	<p>春日御縁起中書 盛賢書写繪 源氏繪 時代不同歌合繪 足引繪 地藏験記繪 十二神繪 九郎判官義經與州泰衡等被討伐繪 目連尊者繪 和田左衛門尉平義盛繪 平家繪 東大寺繪 二月堂繪 児方芸繪 法然上人繪 山臥綱繪 小繪 秋夜長物語繪 強力女繪 ういのせう繪 香助繪 清少納言枕双子繪</p>	<p>二十卷 上下 一卷 五卷 六卷 十卷 三局 七局 二卷 十卷</p>	<p>社寺縁起 雜 物語 歌合 御伽草子 社寺縁起 御伽草子 戰記 高僧伝 戰記 雜 社寺縁起 社寺縁起 高僧伝 御伽草子 御伽草子 御伽草子 御伽草子? 御伽草子? 御伽草子? 物語</p>
<p>一一、 一三</p>	<p>採色 土佐行広</p>	<p>採色 土佐行広</p>	<p>採色 土佐行広</p>

嘉吉元、四、八	むくさい房絵 内裏宝蔵絵	一卷 六卷	御伽草子 雑	
嘉吉二、二、一六 四、一八 五、九七 六、二六 七、二七	十二神絵 智証大師絵 三寺談話絵 狂言絵 大仏絵 平家八嶋絵 玄奘三蔵絵 彦火々出見尊絵 吉備大臣絵 伴大納言絵 六道絵 粉河縁起絵 太神宮法薬寺絵 貞任宗任討伐絵	五局 一卷 一卷 上下 三局 二卷 一卷 一局 数十卷 十一卷 七局 五局 三卷	御伽草子 高僧伝 御伽草子 記録 経説 戦記 高僧伝 説話 説話 説話 雑 経説 社寺縁起 社寺縁起 戦記	採色 窪田
嘉吉三、二、一六 四、一八 八、一 九	和漢婚姻絵 因果絵 中山法師絵 善光寺絵 新善光寺絵 稲荷縁起絵 鹿苑院敷東大寺受戒絵 赤松円心合戦絵 山寺法師絵 香助絵 鐘撞法師	九卷 五卷 八卷 五局 十一卷 二司 上下 一局	雑 経説 御伽草子 社寺縁起 社寺縁起 社寺縁起 記録 戦記 御伽草子 御伽草子? 御伽草子?	採色 土佐行広
一一				

絵巻の往き来に見る室町時代の公家社会

<p>『康富記』 嘉吉 二、六、一一 一一、三 文安 元、閏六、二三 九、三 宝徳 元、一〇、五</p>	<p>顛訪明神縁起絵 文治頼朝幕下被責奥州泰衡御絵 奥州後三年絵 安和二年栗田左大臣在衝申沙汰之尚齒会御絵 繪</p>	<p>十二卷 十卷 四卷 一卷 兩卷</p>	<p>社寺縁起 戦記 戦記 記録 雑</p>	<p>採色 窪田</p>
<p>九、二 八、六 五、二五 二〇 二三</p>	<p>楚波丞絵 高大夫絵 天狗鬼類絵 是容房絵 蝦蟇絵 狂言絵 諸家似絵 伏見宮家宝蔵絵 聖護院絵 強力女絵</p>	<p>上下 上下 一卷</p>	<p>御伽草子? 御伽草子 雑 御伽草子 御伽草子 記録 記録 雑 御伽草子</p>	<p>繪 土佐行広</p>

資料(註)

・「種類」の項は、奥平英雄前携書に基づいている。  
・表中の「年月日」の項は同じ絵巻に関する記事の初出年月日である。

かかれている時期である。貞成親王の許に集まってくる絵巻の数や種類が最も充実している時であり、提供者の顔触れも、後花園天皇や足利義教を中心に多岐にわたっている。

この時期に蒐集された絵巻の数についてみると、一、の期間とは全く異なっている。この蒐集の充実の契機は、永享元(一四二九)年の後花園天皇の即位であろう。また、永享七(一四三五)年に貞成親王が伏見御所から洛中の一条東洞院邸に移ったことも、少なからず影響している筈である。後花園天皇や足利義教との絵巻の行き来が永享七

年以降に多いのもこのためであろう。

絵巻の種類については、そのほとんどを網羅している。<sup>(8)</sup>

資料(二) 唐絵・障子絵・屏風絵等の数

年	数	備考	年	数	備考
応永三三	六		永享五	六	
二四	三		六	三	
二五	三		七	六	年末、一条東洞院邸に移る。
二六	五		八	二	
二七	四		九	三	
二八	一		一〇	一	
二九	三		一一	一	『看聞御記』この年を欠く。
三〇	六		一二	一	『看聞御記』この年を欠く。
三一	二		嘉吉元	二	
三二	〇		二	一	『看聞御記』この年を欠く。
三三	一	『看聞御記』この年を欠く。	三	七	
三四	一	『看聞御記』この年を欠く。	文安元	一	『看聞御記』この年を欠く。
正長元	一	『看聞御記』この年を欠く。	二	一	『看聞御記』この年を欠く。
永享元	一		三	一	『看聞御記』この年を欠く。
二	〇		四	〇	
三	三		五	〇	
四	五		宝徳元	一	『看聞御記』この年まで。



經説類の繪卷は、社寺縁起類・高僧伝類の繪卷と比較すると、数が少ない。これは、經説類の繪卷が、特定の宗教や社寺のことを具体的に扱ったものではないことに起因していると思われる。社寺縁起類の繪卷は、この三種類のうち、最も多い。また、高僧伝類の繪卷も、社寺縁起類の繪卷とほぼ同じ目的で作られたものである。これらの繪卷は、布教手段のひとつであるので、あらゆる立場の人の目を意識した、絵や文体、言葉などに細心の注意を払った完成度の高いものが出来上がっていたと思われる。故に、貞成親王が見た社寺縁起類・高僧伝類の繪卷には、質の高い作品が多かったといえる。社寺や宗教に対する信仰と合わせて、絵画鑑賞の意味もあったのであろう。

物語類の繪卷については、物語を繪卷にして鑑賞する方法が用いられていることを表している。また、伊勢物語の繪卷に関する研究からも、繪卷が物語を鑑賞するための有効な手段であったことが明らかにされている。<sup>(9)</sup> 貞成親王が見た物語類の繪卷も、この方法で鑑賞されていたとみてよい。説話類については、三点あるが、一所より同時に借り受けたものである。<sup>(10)</sup>

御伽草子類の繪卷について特に目立つのが、繪卷の絵や詞を写すことを主とする制作に関する活動である。これは、社寺縁起類・高僧伝類の繪卷では少ない。御伽草子類の話が特定の個人や社寺に属するものではなく、広く一般のものとなっていたことが影響していると思われる。

戦記類の繪卷については、源氏の擡頭から鎌倉幕府の成立期までの期間を題材にしたものが主である。「赤松円心合戦絵」は南北朝時代の武將、赤松則村を扱ったものであろう。足利尊氏に従った人物なので、室町幕府や將軍の意向で作られた可能性が高いと思われる繪卷であり、足利義勝の所持が記されている。<sup>(11)</sup>

歌仙・歌合類の繪卷については、修理が行われている。これが同様のことが記録類の繪卷の「大嘗会御禊行幸絵」

でも行われている。修理をすることも、絵巻の蒐集や鑑賞を充実させるための手段であった様である。

記録類の絵巻については、室町時代の公家社会のなかで、有職故実などの記録が重視されていることを裏付けている。貞成親王と後花園天皇の間のやりとりが主である。有職故実の勉強に、絵を伴う記録が教材として用いられていたことを示している。

三、文安元（一四四四）～宝徳元（一四四九）年の期間については、中原康富が関与したものだけなのでその数は少ないが（嘉吉二年も含む）、伏見宮家で絵巻の鑑賞が継続していたことがわかる。

二度、三度と貞成親王が関った絵巻について考えてみる。これについては、三種類の分け方ができる。Ⅰ、同名・同主題だが、巻数・所持者・入手経路の異なるもの、Ⅱ、同名・同主題・同巻数だが、所持者や入手経路の異なるもの、Ⅲ、同名・同主題・同巻数・同所持者・同入手経路のもの、即ち同一の絵巻、である。この分け方に基づいて作ったのが資料(三)である。Ⅰ、の場合は、同じ内容の絵巻を異本間で比較する目的があった、もしくは全く別の絵巻と見做して鑑賞していた、この二つの可能性がある。Ⅱ、は、原本と写本の関係にある絵巻が多いといえる。Ⅲは、再度鑑賞するためと、絵巻を写すために原本として取り寄せる、の二つがある。どちらの場合でも、対象となった絵巻の完成度は高かったと思われる。

以上、貞成親王が関った絵巻について、数・種類・頻度の点から見てみた。絵巻の数は、貞成親王の置かれている立場の影響を強く受けている。後花園天皇の即位前は、唐絵・障子絵・屏風絵等の日常生活の道具と関りのある絵画が、貞成親王が目にする絵画の中心であった。後花園天皇の即位後は、これらの絵画の鑑賞も充実しているものの、それを凌ぐ勢いで絵巻が集まってきている。貞成親王の許に絵巻が集まるためには、時の天皇の父という立場が必要

資料(三) 貞成親王が数度関った絵卷

No	名称	年月日	内容	絵卷間の関係
一	十二年合戦絵 貞任宗任討伐絵 三卷	永享 三、三、一三 嘉吉 元、五、二七	禁裏からの仰せにより勤修寺門跡より借りる。 内裏より下さる。	
二	後三年合戦絵 奥州後三年絵 六卷 四卷 (康富記)	永享 三、三、一三 文安 元、閏六、二三	禁裏からの仰せにより勤修寺門跡より借りる。 御室より召し寄せられる。康富が詞を読む。	
三	長谷寺縁起絵 泊瀬寺縁起 三卷	永享 三、五、二 五、六、一四	禁裏より借り下さる。 室町殿が内裏に進上した絵を拝見する。	
四	八幡縁起絵 八幡縁起絵 二卷 二卷	永享 三、七、一 七、七、八	内裏へ進める。 御乳人が内裏より持参する。	
五	智証大師絵 智証大師絵 五卷 五卷	永享 五、六、一二 嘉吉 元、四、五	内裏より下さる。聖護院絵。 禁裏より下さる。拝見する。	
六	太神宮法楽寺絵 太神宮法楽寺絵 五卷 五卷	永享 五、六、一四 嘉吉 元、五、二七	室町殿が内裏に進上した絵を拝見する。 室町殿が内裏に進上した絵を拝見する。	同絵卷
七	新善光寺絵 新善光寺絵 三卷 三卷か?	永享 五、六、二〇 嘉吉 三、四、八	内裏より下さる。 或る方より進める。	
八	玄奘三蔵絵 玄奘三蔵絵 十二卷 十二卷	永享 五、七、四 嘉吉 元、四、一七	内裏より下さる。南都大乗院絵。 禁裏より下さる。南都絵也。	同絵卷
九	粉河観音縁起絵 粉河観音縁起絵 七局 七局	永享 六、三、二四 嘉吉 元、五、二五 元、五、二六	禁裏へ見参に入る。伏見宮家宝蔵絵。 内裏より下さる。室町殿が進上する。 内裏より下さる。室町殿が進上する。	二と三は同絵卷
一〇	源氏絵 源氏絵 上下卷 二局 上下	永享 七、五、九 九、一、二七 一〇、五、一六	殿大納言に遣わす。模写の為。 内裏のお召により見参に入る。 禁裏より採色を栗田口民部にと話がある。	一と二は同絵卷 一を写した絵卷

一一	二一	善光寺利生絵 善光寺絵	二写 二巻か？	永享八、五、一九 嘉吉三、四、八	聖護院の絵。住心院が持参する。 或方より進める。	
一二	二一	平治絵 平治絵	永享八、五、三〇 九、六、二三	山門秘蔵絵という話をする。 山門に借覧を依頼する計画を立てる。	同絵巻	
一三	一一	足引絵 足引絵 足引絵	永享八、六、二五 九、二、二五 一〇、五、二六	山門所持。詞の染筆を依頼される。 禁裏が絵を五巻写した。 禁裏の採色の為、山門より借覧する。	一を写した絵巻 一と同絵巻	
一四	二一	高大夫絵 高大夫絵	永享八、七、四 嘉吉三、四、二〇	五条為清へ遣わす。 室町殿が新写したのを見る。		
一五	二一	地蔵絵 地蔵絵 地蔵絵	永享九、八、二九 一〇、六、七	禁裏より給う。拝見する。 室町殿御絵。禁裏より給う。		
一六	二一	九郎判官義経奥州泰衡等被討伐絵 文治頼朝幕下被責奥州泰衡御絵 〔康富記〕	永享一〇、六、八 嘉吉二、二、三	室町殿が進めた絵。禁裏から給う。 伏見殿で拝見する。康富、詞を読む。		
一七	一一	十二神絵（音類歌色） 十二神絵	永享一〇、六、八 嘉吉元、四、四	禁裏より下さる。電覽し返進する。室町殿絵 か。 内裏より給う。室町殿が進上した絵。	同絵巻か？	
一八	二一	香助絵 香助絵	永享一〇、一、一三 嘉吉三、四、一一	鳴滝殿より給う。萩原殿御絵。 室町殿へ見参に入る。	同絵巻か写した絵巻	
一九	二一	強力女絵 強力女絵	永享一〇、一、一三 嘉吉三、九、二	鳴滝殿より給う。 採色が出来る。	一を写した絵巻か？	
二〇	一一	狂言絵 狂言絵	嘉吉元、四、一四 三、四、二三	今出川教季が持参する。書写することを思い 立つ。 室町殿へ見参に入る。	一を写した絵巻	

であつた。繪卷の種類は、ほとんどの種類を網羅している。多く集まっている社寺縁起類・高僧伝類・御伽草子類の繪卷については、繪画作品としての完成度の高さが付与されていたといえる。社寺縁起類・高僧伝類の繪卷は、それを所持する社寺の分身であることを要求されるであらうし、御伽草子類の繪卷は、貞成親王が関つたものだけでも、専門家である繪師の手によるものが多い。この様な点からも、社寺縁起類・高僧伝類・御伽草子類の繪卷には、芸術性の高さが備わっており、貞成親王はそれを解するだけの審美眼を持つていたといえる。頻度については、優れた繪画作品を一度ではなく、二度、三度と手許に集めることができた貞成親王の立場を考慮すべきであらう。

繪卷を数多く手許に集めるためには、芸術を見る確かな眼と、その審美眼を活かすことができる社会的な立場が必要だといえる。後花園天皇の即位後の貞成親王は、その両方を手にしていたのである。

## 二、貞成親王と繪卷に關つた人々

貞成親王と繪卷に關つた人々については、貞成親王の立場の変化に伴う人間關係の変化、及びその影響も併せて考へる必要があるため、一、で用いた時期区分に即してみてゆく。

応永二十三〜正長元年の間については、資料<sup>(四)</sup>を作成した。この期間は、後花園天皇が即位する前であり、伏見宮家關係者による関りがほとんどである。貞成親王の許に集まつた繪卷の数は少なく、その提供は伏見宮家血縁者を通してのものに限られている。これは、崇光院流の貞成親王、彦仁王（後花園天皇）父子が伏見御所で生活しなければならなかつた当時の伏見宮家の政治的な立場を考へに入れておかなければならない。<sup>(12)</sup> 当時の伏見宮家では、伏見宮家

資料(四) 応永二二—正長元年に關つた者

人名・社寺名	年月日	絵巻名	内容	官職等	貞成親王との關係	その他
椎野寺主	応永二三、六、一三	一口物語絵(大覚寺殿御絵)	貞成親王に貸す。	嵯峨椎野寺(浄金剛院)住持職	貞成親王の異母弟	
大覚寺殿	応永二三、六、一三	一口物語絵(大覚寺殿御絵)	所持。	義昭か? 応永二六大覚寺門主		足利義教の弟
世尊寺行豊	応永三〇、四、一三 三二、二、四	伏見宮家玉藏絵 常磐絵(真乗寺所持)	始めて拝見し詞を読む 詞の筆跡を見る。	嘉吉二、非參議從三位 侍從宰相	伏見宮家近臣	能書家
真乗寺殿	応永三二、一一、四	常磐絵	所持。貞成親王に賜う。	真乗寺・景愛寺主	貞成親王の叔母、瑞室	

資料四、五、六註

註であげた本や論文の他に、『公卿補任』、『尊卑分脈』、『群書類從』系譜部「諸門跡譜」、同補任部「天台座主記」、『統群書類從』補任部「興福寺三綱補任」、『古事類苑』、『国史大辭典』、『日本史総覧』、『鎌倉・室町人名事典』等を用いて、人物の照合を行った。

を訪れる人々も、伏見宮家の血縁者や父祖代々の近臣、伏見在住の人々に限られていたであろう。交際範圍がさして広くもなく、伏見に住む貞成親王にとっては、都の華やかさを伝える絵巻よりも、親しい人々と楽しみを共にする方が大切であったと思われる。その結果、伏見御所での、文学や芸能の活動が盛んになったといえる。<sup>(13)</sup>

永享元々嘉吉三年の間については、資料(一)より、後花園天皇の即位の後、絵巻の数が増えていることより、関つた人々や社寺も、増えていると考えられる。そこで煩瑣を厭わず、それぞれの役割について細かくみてゆくことにする。

ア、貞成親王に絵巻を提供した者

ここでは、貞成親王の許にもたらされた絵巻を所持している者、『看聞御記』の本文より、絵巻の流れの出発点と考えられる者を、提供した者とした。貞成親王に絵巻を提供した者については資料(五)一より、提供した頻度に注目して、二度以上提供した者、一度提供した者に分けてみてゆく。

二度以上提供した者は、その提供した絵巻の多くが、後花園天皇が間に立っている絵巻、もしくは、後花園天皇から提供された絵巻である。後花園天皇、足利義教、大乘院、仁和寺がこれに該当する。貞成親王に直接提供された絵巻は、延暦寺、青蓮院<sup>(14)</sup>、足利義勝からのものである。この内、延暦寺の「足引絵」と、青蓮院の「東大寺絵」「二月堂絵」「児方芸絵」は貞成親王から後花園天皇へ進められている。後花園天皇も貞成親王も、將軍や門跡寺院からの提供を受けているといえる。足利義勝はその年齢の幼さによるのか、後花園天皇に提供していない<sup>(15)</sup>。二度以上提供した者の場合、提供する、間に立つ、提供される、この役割のどれかに後花園天皇が関わっていることが多く、後花園天皇が関るということを強く意識した提供であったとみてよい。

一度だけ提供した者についても、絵巻が後花園天皇に提供された後、貞成親王の許へきた場合と、貞成親王に直接提供された場合の二つを考えると、後花園天皇經由の絵巻は、主に鑑賞を目的として提供されている。一方、貞成親王に直接提供されている絵巻は、鑑賞を主としながらも、制作に関っている絵巻も見られる。後花園天皇經由の場合は、將軍や門跡寺院、撰関家からの提供を受けており、貞成親王に直接提供される場合については、公家や門跡寺院、地方の社寺などから提供されている。

絵巻を提供した者全体については、門跡寺院と公家が多い。門跡寺院でまず目に止まるのが、興福寺の院家である

資料(四) 一 貞成親王に絵巻を提供した者

人名・社寺名	年月日	絵巻名	内容	官職等	貞成親王との関係	その他
後花園天皇	永享 三、四、一七 五、二 一一、一五 一二、五	七天狗絵 長谷寺縁起絵 正安朝親行幸絵 小絵(禁中公事等十二月之事) 小絵共	貞成親王に下さる。 貞成親王に借り下さる。 貞成親王に下さる。 貞成親王に下さる。	第一〇二代 彦仁 永享元、即位。	貞成親王の王子	
	四、五、二二 五、六、二〇 七、六、二九 九、五、一五 六、八	新善光寺絵 大嘗会御禊行幸絵 融通念仏絵 愚童記御絵	貞成親王に賜う。 貞成親王に下さる。 貞成親王に見せる。 貞成親王に給う。 貞常王の申し出により下さる。			
	八、一四 二九	因果絵 地藏絵	貞成親王に下さる。 貞成親王に給う。			
	一〇、一一、一一 一一、二、八	秋夜長物語絵 内裏宝蔵絵か?	貞成親王に下さる。 貞成親王に給う。			
	嘉吉 元、四、五 五、二七	智証大師絵 真任宗任討伐絵	貞成親王に下さる。 電覽する。			
勸修寺門跡	永享 三、三、二三	十二年合戦絵 後三年合戦絵 弥益大領絵(勸修寺縁起)	善王座を経て貞成親王が借り給う。			
摂州勝尾寺	永享 三、六、三	勝尾寺縁起絵	法安寺を経て貞成親王が伝借する。			



人名・社寺名	年月日	絵巻名	内容	官職等	貞成親王との関係	その他
二条持基	永享 三、一二、一八	五節絵	所持。後花園天皇に進める。	従一位摂政		
金剛王院	永享 五、六、一二	弘法大師絵	所持。後花園天皇に進める。	醍醐五門跡の一つ。		
聖護院	永享 五、六、一二 八、五、一九	智証大師絵 善光寺利生絵 修験道絵	所持。後花園天皇に進める。 所持。住心院を経て貞成親王が借りる。 所持。貞成親王を経て内裏へ進められる。	満意大僧正		
足利義教	永享 五、六、一四 六、五、二五 一〇、六、二七 八 一〇	絵長權 粉河観音縁起 地蔵験記絵 九郎判官義経奥州泰衡等被討伐絵 目連尊者絵 和田左衛門尉平義盛絵	内裏へ進める。 内裏へ進める。 内裏へ進める。 内裏へ進める。 内裏へ進める。	室町幕府第六代將軍 嘉吉元、六、二四没		
大乘院	嘉吉 元、四、一七 永享 五、七、四	玄奘三蔵絵 玄奘三蔵絵 玄奘三蔵絵 玄奘三蔵絵 粉河縁起絵 大神宮法楽寺絵	所持。詞が伏見院宸筆かを貞成親王に問う。 禁裏に見参に入る。 内裏に進上する。 内裏に進上する。 内裏へ進める。 内裏へ進める。	経覚 興福寺別当		

御室（仁和寺）	永享 六、一〇、二五 一一、八	行幸賀茂祭・檢非違使檢断等繪 悪源太繪 鎮西追討繪	内裏へ進上する。 内裏へ進上する。	承道法親王 永享元、仁和寺寺務 法金剛院 仁和寺宮		
山門（延暦寺）	永享 八、五、三〇	保元繪 平治繪 足引繪	銘の執筆を貞成親王に依頼する。 秘藏繪。 所持。詞の執筆を貞成親王に依頼する。 貞成親王經由で後花園天皇に貸す。	天台座主 義承		足利義教の弟
五条為清	永享 八、七、四	狭衣繪	貞成親王に進上する。	永享九、非参議従三位大藏卿 後花園天皇の侍統		
青蓮院	永享 九、八、一八	慈恵大師繪	法輪院を経て貞成親王に進める。			
鳴滝殿	永享 一〇、二、二七 一一、一三	春日御縁起中書 強力女繪 ういのせう繪 香助繪	所持。貞成親王に貸す。 所持。貞成親王に貸す。	鳴滝殿十地院 智観		貞成親王の姪
法性寺為季	永享 一〇、五、二四	時代不同歌合繪	所持。庭田重有を経て貞成親王に貸す。	永享三、正五位下元 兵部大輔侍從		
法輪院	永享 一〇、六、一七	東大寺繪 二月堂繪 児方芸繪	貞成親王に進める。	青蓮院の僧 法輪院主 心勝律師		伏見宮家出入りの者

人名・社寺名	年月日	繪卷名	内容	官職等	貞成親王との関係	その他
花山院持忠	永享一〇、六、二四	法然上人繪	入江殿を經て貞成親王へ進める。禁裏に見参に入れるためである。	從二位權大納言右大將	貞成親王との関係	
今出川教季	嘉吉元、四、一四	狂言繪	貞成親王の許に持参する。	永享八、從五位下左少將	貞成親王養父、今出川公行の玄孫	
慈恩院	嘉吉元、四、一五	大仏繪	後花園天皇に進める。	興福寺の一院		
喜多院	嘉吉元、四、一五	平家八嶋繪	後花園天皇に進める。	興福寺の一院		
若州松永庄新八幡宮	嘉吉元、四、二六	彦火々出見尊繪 吉備大臣繪 伴大納言繪	小川淨喜が話して貞成親王が社家より借り召す。			
西園寺公名	嘉吉元、五、九 六、一七	六道繪 六道繪	所持。貞成親王に見参に入る。 貞成親王に進める。内裏へ見参に入るためである。	正二位 内大臣		
寂靜院	嘉吉三、二、一八	因果繪	貞成親王に進める。		伏見宮家出入りの者か	
或方	嘉吉三、四、八	善光寺繪 新善光寺繪	貞成親王に進める。			
足利義勝	嘉吉三、四、九 二〇	稲荷縁起繪 鹿苑院殿東大寺受戒繪 赤松円心合戦繪 高大夫繪	貞常王に貸す。 貞成親王に給う。	室町幕府第七代將軍 嘉吉三、七、二一没		

大乘院、慈恩院、喜多院である。興福寺に限らず、門跡寺院が絵巻の提供に関与しているということは、門跡寺院に絵巻を所有する方法があったことを表している。<sup>(16)</sup>公家からの提供については、後花園天皇の父という、貞成親王の立場が大きく影響しているといえる。個人的な誼による提供は、後花園天皇を除くと三例しかない。<sup>(17)</sup>このことより、絵巻は公の立場に左右されやすい絵画であることが、一、と同じくいえるであろう。

イ、貞成親王から絵巻を提供された者

資料(五)―二より、貞成親王から絵巻を提供された者は、絵巻を提供した者と比べて少ないことがわかる。後花園天皇へ進めた絵巻が群を抜いて多いのは、父子の間柄と、後花園天皇が書画に造詣が深かったことなどからも、自然なことである。<sup>(18)</sup>二条持通へは、「為被写」の申し出により提供した。このことは当時、撰関家でも伏見宮家と同様に、模写による絵巻の蒐集が行われていたことを表している。五辻持経は伏見宮近臣ということで、提供を受けることができたのであろう。五条為清は、永享九年頃より、後花園天皇の侍読である。その繋がりから、貞成親王と絵巻を提供し合っているといえる。足利義勝へは、義勝が提供した絵巻に対する礼として提供されている。<sup>(19)</sup>足利義勝に提供したのはこの二例のみであるが、絵巻の提供に対する返礼の心配りを見ることが出来る。

貞成親王から絵巻を提供された者については、天皇、將軍、撰関家、貞成親王や後花園天皇との繋がりや特に強い者に限られており、その数も少ない。貞成親王から絵巻を提供される者は、貞成親王との対等な交際が可能な立場の者や、その者との関係を良好に保つべきだと貞成親王が判断した者だといえる。よって、絵巻を提供し合うことは、提供する者にとっても、提供される者にとっても、公家社会における交際の特別な意味があったのではないかと考

資料(五)―二 貞成親王から絵巻を提供された者

人名・社寺名	年月日	絵巻名	内容	官職等	貞成親王との関係	その他
後花園天皇	永享 三、七、一 四、六、一 六、三、二四	八幡縁起絵 宝篋印陀羅尼絵 唐使図 御賀絵 粉河親首絵 書写上人絵 犬頭糸絵 伏見宮家宝蔵絵 源氏絵	貞成親王が進める。 貞成親王が見参に入る。 伏見宮家宝蔵絵。 お召しにより貞成親王が見参に入る。 貞成親王が見参に入る。 お召しにより貞成親王が見参に入る。 貞成親王が見参に入る。	第一〇二代 彦仁 永享元、即位。	貞成親王の王子	
二条持通	永享 七、五、九	源氏絵	写すために貞成親王が進める。	正三位権大納言		二条持基の子
五辻持経	永享 七、五、一四	墨過絵	貞成親王が貸す。	藏人	伏見家近臣	
五条為清	永享 八、七、四	高大夫絵等	狭衣絵を進めた代わりに遣わす。	永享九、非参議従三位大藏卿 後花園天皇の侍読		
足利義教	永享一〇、一〇、二七	小絵	貞常王の絵。	室町幕府第六代將軍 嘉吉元、六、二四没		

足利義勝	嘉吉 三、 四、 一一	香助絵 鐘撞法師 楚波丞絵 天狗鬼類絵 是容房絵 蝦蟇絵	二二三	絵のお礼に貞成親王 が進める。 貞成親王が見参に入 る。	室町幕府第七代將軍 嘉吉三、七、二二没		
------	-------------	---	-----	---------------------------------------	------------------------	--	--

えられる。

ウ、間に立つ者

貞成親王と、絵巻を提供した者・提供された者の間に立つ者（以下「間に立つ者」と略す）については、資料(五)三より、ア、イ、とは顔触れが異なっていることがわかる。絵巻の往き来は、絵巻を提供した者——間に立つ者——貞成親王、貞成親王——間に立つ者——絵巻を提供された者の流れの中で行われている。また、絵巻を提供した者、提供された者の公家社会における立場が上になる程、間に立つ者が多くなると考えられる。『看聞御記』に記されているのは貞成親王側の間に立つ人が多い。よって、絵巻の往き来の流れは細かく見ると、絵巻を提供した者・提供された者——提供した者・提供された者の側の間に立つ者——貞成親王の側に立つ者——貞成親王となる。

貞成親王は、後花園天皇に絵巻を進めるために間に立っている。貞成親王は伏見宮家にある絵巻だけでなく、他所から借りてきた絵巻も後花園天皇に進めている。貞成親王が後花園天皇に進めた絵巻は、提供者に社寺に関する者が多く、後花園天皇が間に立って進めた絵巻は、足利義教からの提供を主としている。

間に立つ者それぞれについては、後花園天皇、門跡寺院、公家、伏見宮家出入りの僧、伏見庄の地侍等、伏見宮家

絵巻の往き来に見る室町時代の公家社会

関係者が多い。これは、絵巻に関する活動が貞成親王の個人的な趣味ではなく、伏見宮家全体の活動として捉えられていることを示している。

エ、貞成親王の絵巻の鑑賞に関する者

資料(五)―四より、伏見宮家近臣が関わっていることがわかる。伏見宮家近臣の関与ということから、ウ、の該当者の中より、貞成親王の鑑賞に関った可能性のあるもの五名を加えても、貞成親王の許に集まった絵巻の数にしては、共に鑑賞する者が少ない。『看聞御記』に記されていないだけで、貞成親王は他の絵巻も伏見宮家関係者と共に鑑賞していたのだろうか。

美濃部重克氏の研究によると、<sup>(21)</sup>「テキストが読み手もその構成員であるところの座の中に開放され、座による増幅を経ながら享受される」方法を「座的享受」とし、「絵のついた大形の、しかも画中詞を持ったもの」が適するとされている。更に、「座的享受を可能にする基本的な状況は、座敷の中に親密な間柄の人々が同座して、その前に本が広げられ、一人がテキストを朗読するか物語の説明をするかして、皆がそれを聞くといいた享受の場であった」とされている。ここで取り上げる四名は、「座的享受」に当てはまるのだろうか。それぞれの例をあげてみる。

応永三十年四月十三日「宝蔵絵」

宝蔵絵披見。行豊朝臣始而拜見読詞。

永享九年五月十五日「融通念仏絵」

持経朝臣祇候。此念仏事殊勝之談義申。可入勸進帳之由申。宮中上下男女各入之。

資料(五)―三 間に立つ者

人名・社寺名	年月日	絵巻名	内容	官職等	貞成親王との関係	その他
貞成親王	永享 三、三、二三	十二年合戦絵 後三年合戦絵 弥益大領絵(勸修寺 縁起)	勸修寺門跡絵。禁裏の絵 を見たという依頼にこ たえて借りる。観覧に備 える。 内裏に見参に入る為法安 寺を経て伝借する。 住心院が前日持参したも のを内裏へ見参に入る。 鳴滝殿より借りて、この 日に内裏へ進める。 庭田重賢が進めた法輪院 の絵を内裏へ献じる。 入江殿より伝借し内裏へ 進める。 若州松永庄新八幡宮から 前日に借り召したものを 内裏へ見参に入る。 西園寺八公名が進めたもの を内裏へ見参に入る。	伏見官家第二代 後崇光院	貞成親王との関係 後花園天皇の父	『看聞御記』 の筆者
善主座	永享 三、三、二三	十二年合戦絵 後三年合戦絵 弥益大領絵(勸修寺 縁起)	勸修寺門跡絵。貞成親王 との間に立つ。		伏見官家出入りの 者?	
法安寺	永享 三、六、三	勝尾寺縁起絵	貞成親王の許へ持参する。	良明	伏見官家出入りの 者	
	嘉吉 元、四、二七	彦火々出見尊絵 吉備大臣絵 伴大納言絵 六道絵				
	二五	法然上人絵				
	六、一七	東大寺絵 二月堂絵 児方芸絵				
	一〇、二、三〇	春日御縁起中書				
	八、五、二〇	善光寺絵				
	六、三	勝尾寺縁起絵				



人名・社寺名	年月日	絵巻名	内容	官職等	貞成親王との関係	その他
後花園天皇	永享 三、一二、八	五節絵	二条持基所持。 貞成親王に下さる。	第一〇二代 彦仁 永享元、即位	貞成親王の王子	
	五、六、一四	太神宮法楽寺絵	室町殿の絵。貞成親王に下さる。			
	一六	泊瀬寺縁起絵	室町殿が進めた絵か？			
	一六	八坂法親寺塔縁起絵	貞成親王に下さる。			
	七、四	聖廟御絵				
	七、四	義湘大師絵				
	七、四	青丘大師絵				
	七、四	玄莊三蔵絵				
	六、五、二五	粉河観音縁起絵	南都大乗院絵。貞成親王に下さる。			
	一〇、二五	行幸賀茂祭・檢非違使檢断等絵	室町殿の絵。貞成親王に下さる。			
	一一、八	悪源太絵	御室が進める。貞成親王に下さる。			
	一〇、六、七	鎮西追討絵	室町殿御絵。貞成親王に給う。			
	八	地藏験記絵	室町殿の絵。貞成親王に下さる。			
	一〇	十二神絵(音類歌合)	室町殿の絵。貞成親王に給う。			
	一一三	九郎判官義経奥州泰衡等被討伐絵	室町殿の絵。貞成親王に給う。			
	一一三	目連尊者絵	室町殿の絵。貞成親王に給う。			
	一一三	和田左衛門尉平義盛絵	室町殿の絵。貞成親王に給う。			
	一一三	平家絵	室町殿の絵。貞成親王に給う。			
	一一三	むくさい房絵	室町殿の絵。貞成親王に給う。			
	一一三	嘉吉元、四、四	十一神絵			
	一一三	十一神絵	室町殿の絵。貞成親王に給う。			

	<p>六 三寺談話絵 一五 大仏絵</p>	<p>室町殿の絵。貞成親王に下さる。 慈恩院の絵。貞成親王に下さる。 喜多院の絵。貞成親王に下さる。 南都絵。貞成親王に下さる。 室町殿の絵。貞成親王に下さる。 室町殿の絵。貞成親王に下さる。</p>	<p>室町殿の絵。貞成親王に下さる。</p>		<p>後花園天皇の御乳人</p>	
<p>御乳人</p>	<p>永享 六、一二、三六 七、七、八 九、一四</p>	<p>若法師児絵 八幡縁起御絵 大嘗会御禊行幸絵</p>	<p>後花園天皇から貞成親王にへ持参する。 内裏から貞成親王の許へ持参する。 修理済みのものを貞成親王から後花園天皇へ進める。</p>			
<p>住心院</p>	<p>永享 八、五、一九</p>	<p>善光寺利生絵 修験道絵</p>	<p>聖護院の絵。貞成親王の所望により持参する。</p>	<p>実意</p>	<p>伏見宮家出入りの者</p>	
<p>五辻重仲</p>	<p>永享 八、五、三〇 閏五、四 九</p>	<p>保元絵 保元絵 保元絵</p>	<p>上を持参し銘の事を話す。銘の染筆について中山定親の意を伝える。 中下を持参し銘の事を言う。</p>	<p>従五位下藏人阿波守</p>	<p>伏見宮家近臣</p>	

人名・社寺名	年月日	絵巻名	内容	官職等	貞成親王との関係	その他
中山定親	永享 八、五、三〇 閏五、四	保元絵 保元絵	山門の銘染筆の依頼を五辻重仲を経て伝える。銘の染筆は避けられないことだと五辻重仲を経て伝える。 西園寺公名より借請て室町殿へ進めたものか？	永享八、正三位参議 左中将 嘉吉元、従二位権中納言 武家伝奏	貞成親王との関係	
定直	永享 八、六、二五 一〇、五、二七 二八	足引絵 足引絵 足引絵	所縁があつて山門の足引絵を持参する。詞の染筆を依頼する。 弟が山門の僧の縁で間に立つ。 貞成親王の許に持参する。		伏見宮家出入りの者	
五辻持経	永享 九、五、一五 一〇、八 嘉吉 元、五、九	定智真筆絵 関白出仕絵 六道絵	貞成親王に見参に入る。定智筆。貞成親王へ持参する。 西園寺公名の絵。貞成親王に見参に入る。	藏人	伏見宮家近臣	
法輪院	永享 九、八、一八	慈恵大師絵	青蓮院御絵。貞成親王へ持参する。	主 心勝律師 法輪院	伏見宮家出入りの者	
庭田重有	永享 一〇、五、二四	時代不同歌台絵	法性寺為季の絵巻を校本にする為に借用する。	従二位権中納言	伏見宮家近臣 貞成親王の室庭田幸子の兄	
庭田重賢	永享 一〇、六、一七	東大寺絵 二月堂絵 児方芸絵	法輪院の絵を貞成親王に進める。	永享三、従五位上 左近少将元侍従	伏見宮家近臣 庭田重有の子	

入江殿	永享一〇、六、二四	法然上人絵	花山院持忠の絵。貞成親王に貸す。	入江殿三時知恩院主 性恵 嘉吉元、五、二八没	貞成親王の王女 後花園天皇の姉	
入江殿北御寮	永享一〇、一〇、二七	小絵	室町殿の意を受けて小絵の提供を貞成親王に申し入れる。	入江殿関係者か？		
小川淨喜	嘉吉元、四、二六	彦火々出見尊絵 吉備大臣絵 伴大納言絵	若州松永庄新八幡宮の絵。貞成親王にこれらの絵巻のことを話す。	伏見庄政所・若狭国松永庄代官職		
綾小路有俊	嘉吉三、五、二五	諸家似絵	持明院殿宝蔵絵。伏見殿御絵。貞成親王の許に持参する。	従四位下右中將	伏見宮家近臣	

永享十年六月八日「九郎判官義経奥州泰衡等被討伐絵」

男共祇候覽之。行豊朝臣誦詞。

同十三日「平家絵」

持経朝臣。重仲等候。平家詞。源中納言。行豊朝臣誦之。

嘉吉元年四月十五日「大仏絵」「平家八嶋絵」

絵巻の往き来に見る室町時代の公家社会

資料(四) 貞成親王の絵巻の鑑賞に関する者

人名・社寺名	年月日	絵巻名	内容	官職等	貞成親王との関係	その他
五辻持経	永享 九、五、一五	融通念仏絵	この念仏はありがたいものだ と談ずる。	藏人	伏見宮家近臣	
世尊寺行豊	永享 一〇、六、一三 嘉吉 元、四、一五	平家絵 大仏絵 平家八嶋絵	五辻重伸等と鑑賞する。 詞を読む。	嘉吉一、非参議 従三位侍従宰相	伏見宮家近臣	能書家
五辻重伸	永享 一〇、六、一三	平家絵	庭田重有と詞を読む。	従五位下藏人阿波守	伏見宮家近臣	
庭田重有	永享 一〇、六、一三 一一、三	平家絵 清少納言枕双子絵	世尊寺行豊と詞を読む。 詞が伏見院の手になるか 否かは定かではないと言 う。	従二位権中納言	伏見宮家近臣 貞成親王の室庭田 幸子の兄	

詞持経朝臣読之。

この四名が「座的享受」に参加していることは明白である。

「座敷の中に親密な間柄の人々が同座して」から思い至るのは、伏見宮家の連歌会である。これについては、横井清氏や位藤邦生氏の研究に詳しい。<sup>(22)</sup> 伏見宮家の連歌会と絵巻の鑑賞には、気心の知れた人々とひとつの対象に向き合うという共通点がある。よって、貞成親王は絵巻の鑑賞の場を、「宮中の人々」<sup>(23)</sup>が集まり語らう場と認識していたと思われる。

才、貞成親王の絵巻の制作に関する者

貞成親王の絵巻の制作に関わる者については、資料(五)―五を作成した。(24)

まず、絵巻の詞に関つた者については、世尊寺行豊と清水谷公知については、能書家としての力量を請われての参加である。また、世尊寺行豊は伏見宮家近臣の一人である。側近の者に能書家がいることが、貞成親王の絵巻の鑑賞や制作の活動に大きな影響を与えている。後花園天皇は詞と絵の両方に関与している。中でも「足引絵」は後花園天皇自身が絵を全巻模写し、制作の過程を取り仕切っている。(25) 『看聞御記』の中で貞成親王は、後花園天皇の画才を認め(26) ている。書については現存している後花園天皇の書から、その実力を知ることができる。(27) 五辻持経には、詞を書く時の裏方役の活動を見ることが出来る。五辻持経は「足引絵」の清水谷公知の担当分の中書をした。(28) これは絵巻の詞を筆写する方法に、実物を見ながら書き写すことだけでなく、必要な所だけ書き抜き、改めて清書をする方法が用いられていたことを表している。絵巻の様な卷子の形の場合、この方法がむしろ多かつたかもしれない。貞成親王については、後花園天皇同様、書が巧みであったと思われる。(29) このことと、天皇の父という立場を反映してか、延暦寺からの銘や詞の執筆の依頼がある。残りは後花園天皇からの依頼である。

また、詞には「玄弊三蔵絵」や「稻荷縁起絵」の詞の筆写の様に、伏見宮家の中で手分けするものもある。大がかりなものだけでなく、手早く行うこともあったのである。(30)

絵に関つた者について。粟田口隆光(31)、土佐行広(32)、窪田(33)は絵画を専門とする絵師である。橘以盛は公家である。相澤正彦氏の研究によると、以盛は「宮中近臣として諸務に従事する一方では、貴顕のたしなみとして画事をもつた」人である。それは貞成親王が「頗不恥絵所能筆。」と評したことからも明らかである。(36)

清賢、盛賢は伏見宮家関係者であり、絵心のある者である。<sup>(37)</sup>また、絵心があることを活かして、絵師と貞成親王の間に立って、窓口役を受け持っている。担当する絵師も決まっています、清賢が土佐行広、盛賢が粟田口隆光である。絵の専門家である絵師と、完成度の高い絵画を求める貞成親王の間に、絵心のある伏見宮家関係者がいる。これは絵巻の制作を円滑にするための有効な方法である。照善は、清賢や盛賢と同様に、絵師の窪田と貞成親王の間に立っている。だが、清賢や盛賢の時の様に順調に事は運ばず、「中山法師絵」は採色のやり直しを行っている。<sup>(38)</sup>これは照善が貞成親王と窪田の意向をうまく把握できていなかったことによると思われる。この様な行き違いを防ぐためにも、窓口役には絵心のある者を登用する方が良いのであろう。

表補師や経師（どちらも表具師にあたる職業であろう）の仕事の実態も『看聞御記』から垣間見ることができる。特に「大嘗会御禊行幸絵」は、「修理料七百疋。」と具体的に記されている。<sup>(39)</sup>表補師や経師は、絵巻の制作の総仕上げや、完成後の修理を受け持つという形で貞成親王の絵巻の制作に関っている。また、祐全という人物が貞成親王から料紙の調達、裏打ち、詞の切統を命じられているが、彼も表補師や経師の一人であろうか。それとも、表具に詳しい人で、表補師や経師と貞成親王の間に立っていた人であろうか。

貞成親王の絵巻の制作に関する者は、書や絵画、表具の専門家、そして貞成親王に親しい者で、その道に少なからず通じている者を中心としている。貞成親王と専門家の間に、貞成親王と親しい者が入り、双方の調整役をしているのである。

カ、その他の者

資料(四)一五 貞成親王の絵巻の制作に関する者

人名・社寺名	年月日	絵巻名	内容	官職等	貞成親王との関係	その他
清賢	永享 四、九、六 九、一二、一二 一〇、八、二六 嘉吉 三、四、九	年中行事絵 定智筆絵 山臥綱絵 山寺法師絵	写す。 写す。 採色は土佐将監。 貞成親王からの採色の依頼を土佐将監に伝える。		貞成親王との関係 伏見宮家の承仕	絵が巧みである。
表補師	永享 七、九、一四 一一、五	大嘗会御禊行幸絵 大嘗会御禊行幸絵	修理を依頼された七巻の内の一巻が出来たので貞成親王に進めた。 修理が完成し、修理料七百疋と引出物をいただく。			表具師に同じ。
貞成親王	永享 七、一二、五 八、五、三〇 六、二五 九、六、二六 一〇、五、一三 二四 六、二〇 二九 七、二八 八、一二	大嘗会御禊行幸絵 保元絵 足引絵 定智真筆絵 盛賢書写絵 時代不同歌合絵 時代不同歌合絵 時代不同歌合絵 足引絵 足引絵 源氏絵	修理が完成する。 山門より銘の染筆の依頼を受ける。 山門より第四巻の詞を依頼される。 写すことを思い立つ。 採色を土佐将監に命じる。 法性寺為季の本で校合する。絵を盛賢に写させる。 書写が終る。詞は世尊寺行豊が書く事になった。 内裏から詞を書くように言われる。 第二巻の詞を書き、禁裏へ進める。 詞を書く。	伏見宮家第二代 後崇光院 後花園天皇の父		『看聞御記』の筆者

絵巻の往き来に見る室町時代の公家社会



人名・社寺名	年月日	絵巻名	内容	官職等	貞成親王との関係	その他
後花園天皇	永享 七、二二、五 一八、二五	中山法師絵 大嘗会御禊行幸絵	窪田の採色が出来る。 修理料と引出物を表補師に下さる。 銘の執筆を世尊寺行豊に命じる。	第一〇二代 彦仁 永享元、即位。	貞成親王の王子	
	嘉吉 元、四、一四 一七 三、四、一 九 一〇 九 一 九、二 一九	源氏絵 狂言絵 玄辨三蔵絵 中山法師絵 山寺法師絵 稲荷縁起絵 強力女絵 中山法師絵	詞の書き直しをする。 下巻の詞を書き進める。 詞を書き、禁裏に見参に入る。 仕立てて内裏へ進める。 書写を思い立つ。 詞を写す。 採色は窪田。 採色を土佐将監に命じる。 詞を男共に写させる。 窪田の採色が出来る。 窪田に採色のやり直しを命じる。			
	九、二、二 二八 一〇、七 一〇、二五 九、二、二五 一〇、三、二九 五、一六 二六 六、二二 二九 七、一	足引絵 源氏絵 綱山臥絵 源氏絵 足引絵 源氏絵 盛賢書写絵か？ 足引絵 源氏絵 足引絵 源氏絵 足引絵 足引絵 足引絵	詞の料紙を提供する。 詞を二巻と五巻が貞成親王、第三を世尊寺行豊に命じる。			

世尊寺行豊	永享 八、二、二三 一〇、六、二〇 足引絵 時代不同歌合絵 二九 足利絵(足引絵か?)	大書会御禊行幸絵 時代不同歌合絵 足引絵	第五卷は宸筆となる。 絵は粟田口民部、詞は勅筆。 下巻の詞の染筆を貞成親王に命じる。上巻は宸筆。	嘉吉一、非参議従三位 侍従幸相	伏見宮家近臣	能書家
五辻重仲	永享 八、五、三〇	保元絵	銘の染筆を貞成親王に依頼する。	従五位下藏人阿波守	伏見宮家近臣	
粟田口隆光	永享 八、六、二五 一〇、五、一七 源氏絵 源氏絵 源氏絵	足引絵 源氏絵 源氏絵	絵を書く。 貞成親王から絵の依頼を受ける。 貞成親王が料紙を遣わず。絵が出来たので進める。	民部少輔 隆光 法眼		絵師
清水谷公知	永享 八、六、二五 一〇、七、四	足引絵 足利絵(足引絵か?)	詞を書く。 第四巻の清書をする予定。	正四位下右中将		能書家
土佐行広	永享一〇、五、一三	盛賢書写絵	採色を命じられる。	土佐守 将監		絵師

人名・社寺名	年月日	絵巻名	内容	官職等	貞成親王との関係	その他
盛賢	永享一〇、五、二三 二四 二五 嘉吉元、四、一五 六、五	盛賢書写絵 時代不同歌合絵 源氏絵 狂言絵 狂言絵	絵を写す。 絵を校本から写す。 粟田口民部の返事を貞成親王に伝える。 絵を写す。 絵を写し終える。		伏見宮家出入りの者	絵が巧みである。 清賢と同一人物か？
祐全	永享一〇、五、二七 六、二 一一 一一	源氏絵 足引絵 足引絵 時代不同歌合絵	料紙を遣わされ、調進を命じられる。 第一の裏打ちを命じられる。 料紙を二枚重ねて打つよう命じられる。 切統。			表補師・経師の名か？
五辻持経	永享一〇、七、四 一〇、七 七、二 二七	足引絵(足引絵か?) 源氏絵 足引絵 足引絵 時代不同歌合絵	第四巻の詞の中書をする。 詞の料紙を切統。 詞の切統をする。	蔵人	伏見宮家近臣	
橘以盛	永享一〇、七、二二	足引絵	第二巻の採色をする。	永享二、民部少輔 嘉吉元、民部大輔		絵の巧みな公家 表補師に同じ。
経師	永享一〇、八、七	足引絵	切統をする。			

	<p>一〇 足引絵か？ 九、一四 足引絵か？ 一〇、一四 源氏絵</p>		<p>切続をする。 切続をする 紐が出来たので付けて進める。</p>			<p>絵師</p>
<p>窪田</p>	<p>嘉吉 元、四、六 三、四、一 九、二 一九 一一、二五</p>	<p>三寺談話絵 中山法師絵 強力女絵 中山法師絵 中山法師絵</p>	<p>絵を書く。 照善を通して採色を命じられる。 採色が出来たので進める。 採色のやり直しを命じられる。 採色が出来たので進める。</p>		<p>伏見宮家出入りの者</p>	
<p>照善</p>	<p>嘉吉 三、四、一 九、二 一九 一一、二五</p>	<p>中山法師絵 強力女絵 中山法師絵 中山法師絵</p>	<p>知人の窪田に採色が命じられる。 窪田の採色が出来たので進める。 窪田の採色が出来たので持参する。が、やり直しを命じられる。 窪田の採色が出来たので進める。</p>			

ここでは『看聞御記』に記されているが、ア、イ、ウ、エ、オ、の何れにも入れるのが難しいものをまとめておいた。それが資料(五)―六である。

ここで注目すべきは、洞院実熙と烏丸資任、一条兼良の三名である。洞院実熙は足利義教の、烏丸資任と一条兼良

資料(四)一六 その他の者

人名・社寺名	年月日	絵巻名	内容	官職等	貞成親王との関係	その他
洞院実照	永享 五、六、一四		室町殿の意をうけて、絵巻の提供を貞成親王に申し入れるが、断られる。	従二位権大納言 内教坊别当		
仏眼院宗円律師	永享 九、二、三〇	足引絵	山門使節として、詞を染筆したことに對する礼状を持参する。	延暦寺の僧		
鳥丸資任	嘉吉 元、四、一五	大仏絵 平家八嶋絵	内裏の意を受けて、慈恩院、喜多院より借りる。	従四位下藏人權右中弁		
一条兼良	嘉吉 元、五、七		禁裏に絵を見参に入るために、西園寺公名に提供を申試すが、不所持といわれる。	従一位前左大臣 前摂政		

は後花園天皇の絵巻の鑑賞のために動いている。これは貞成親王の許に絵巻を集めるために、伏見宮家関係者があち  
らこちらと間に立っていた姿と重ねることができるといえる。だが、洞院実照も一条兼良も、所持者からの提供を断られてい  
(4)る。このことは、貴人の許に絵巻が進上されるまでには、側近の者が打診しては断られることが幾度となくあったこ  
とを表している。『看聞御記』に記されている絵巻は、交渉が成功したものである。そう考えて資料(一)や(四)を見直す  
と、貞成親王の絵巻に関する活動は、貞成親王の熱意だけではなく、伏見宮家関係者の理解や協力に支えられていた  
といえる。

文安元々徳元元年の間(一、と同じく嘉吉二年も含む)については、資料(六)を作った。『唐富記』からは、わずか

資料(六) 文安元〜宝徳元年に關つた者(嘉吉二年も含む)

人名・社寺名	年月日	絵巻名	内容	官職等	貞成親王との関係	その他
中原康富	嘉吉二、六、一一 一一、二六	諏訪明神縁起絵	伊勢貞親方で聴聞拝見する。 貞成親王にこの絵巻のことを申し上げる。媒介して借りるよう言われる。 伏見殿で詞を読む。	権大外記 明法家	貞常親王の家庭教師	『康富記』の筆者
	一一、三 文安元、閏六、二三 九、三	文治頼朝幕下被責奥 州泰衡御絵 後三年絵 安和二年栗田左大臣 在衛中沙汰之尚歯会 御絵	伏見殿で拝見し詞を転読する。 伏見殿で詩を読むよう言われる。 伏見殿で詞を読む。			
伊勢貞親	嘉吉二、六、一一	諏訪明神縁起絵	中原康富と聴聞拝見する。	寛正元、政所執事 兵庫助		
諏訪貞郷	嘉吉二、六、一一 一一、二八 一一、一 二三	諏訪明神縁起絵 諏訪明神縁起絵 諏訪明神縁起絵	伊勢貞親方へ持参する。 中原康富から伏見殿へ進めるように言われる。 中原康富が同道して、伏見殿へ進める。 中原康富と伏見殿へ参り返される。天覧に備えるよう言われる。	康正二、室町幕府奉行人 左近将監 貞通		
庭田重賢	嘉吉二、一一、一	諏訪明神縁起絵	諏訪貞郷が進めた時に取り次をする。	永享三、従五位上 左近少将元侍従	伏見宮家近臣 庭田重有の子	

人名・社寺名	年月日	絵巻名	内容	官職等	貞成親王との関係	その他
貞常親王	嘉吉 二、一二、三 文安 元、閏六、二三 九、三	文治頼朝幕下被貴奥州泰衡御絵 後三年絵 安和二年栗田左大臣在衡申沙汰之尚齒会御絵	中原康富に詞を読ませる。 中原康富に詞を読ませる。 四條隆盛より借り召す。 中原康富に詩を読ませる。 中原康富に詞を読ませる。	文安二、親王宣下 同三、式部卿 同四、二品	貞成親王の王子 後花園天皇の弟	
御室(仁和寺)	文安 元、閏六、二三 宝徳 元、一〇、五	後三年絵	伏見殿に召し寄せられる。 伏見殿に貸す。	承道法親王 永享元、仁和寺寺務 法金剛院 仁和寺宮		
四條隆盛	文安 元、九、三	安和二年栗田左大臣在衡申沙汰之尚齒会御絵	伏見殿に貸す。	従一位權中納言		

であるが、伏見宮家関係者から見た絵巻に関する活動を知ることができる。「諏訪明神縁起絵」は側近の者が多方に働きかけて絵巻を集めてきていることの実例である。<sup>(註)</sup>ここで中原康富が行っている様なことを、伏見宮家関係者や、貴人の側近の者が日々行っていたと思われる。

以上、三つの時期に区切って分析した結果、絵巻に関する活動を充実させるためには、絵巻を手許に集める者の社会的地位が必要である。貞成親王の場合、応永二十三〜正長元年、永享元〜嘉吉三年を比較すると明らかである。絵巻を手許に集める者の社会的地位が上昇すると、交際の範囲も広がる。そして、側近の者や関係者を総動員して絵巻を集めることができる。貞成親王については、親王自身、書や絵画に関心があったことも影響して、ここで整理した

様な大規模なものになったといえる。また、『看聞御記』中に記されてある、他の貴人や公家との絵巻の往き来より、伏見宮家と同様のことが他家でも行われていたといえる。その規模の大小は、社会的地位と書や絵画に対する関心の有無に左右されると思われる。

### 三、公家社会における文化の形成過程

一、二、で貞成親王の絵巻に関する活動を、絵巻や人間関係の点からみてきた。その成果を基にして、ここでは室町時代の公家社会における文化の形成について考えてゆく。

そこでまず、唐絵・障子絵・屏風絵等について考えてみる(資料(二)参照)。障子絵や屏風絵は、障子や屏風といった生活の道具に描かれているものであり、唐絵は、連歌会や七夕の座敷飾りといった折々の行事の際には欠かせないものである。<sup>(43)</sup>よって、唐絵・障子絵・屏風絵等は、日常生活と強く結びついた絵画だといえる。また、後花園天皇との関りは、永享八年からである。<sup>(44)</sup>前年の永享七年十二月十九日に、貞成親王は伏見から一条東洞院邸に移っている。貞成親王が都に生活の場を移すことにより、後花園天皇との唐絵・障子絵・屏風絵等の往き来が始まっている。このことから、これらの絵画と日常生活の結び付きをみることができる。

伏見御所で生活していた時期(応永二十三〜永享七年)については、伏見御所の近隣の寺院に貞成親王が出向いて、障子絵や屏風絵を見たり、<sup>(45)</sup>伏見宮家で所持している絵や借りてきた絵を七夕や連歌会の時に飾ったりしている。<sup>(46)</sup>また、唐絵の場合は、贈答品としても用いられている。<sup>(47)</sup>

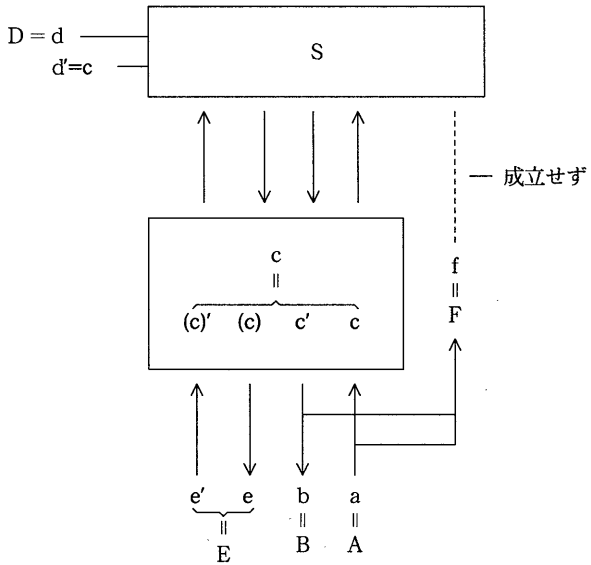


一条東洞院邸で生活していた時期（永享八〜文安五年）については、主に絵画鑑賞の対象となっていて、伏見宮家関係者以外の者の関りが少ないことは、伏見御所で生活していた時期と変わらない。<sup>(48)</sup> 違うのは、障子絵や屏風絵を見るために貞成親王自身が出歩かなくなったこと、<sup>(49)</sup> 絵巻と同様に、後花園天皇が絵の往き来の主な対象であることの二点である。<sup>(50)</sup> 貞成親王が出歩かなくなったことについては、貞成親王の年齢（永享八年一六十五歳）のこともあるが、後花園天皇の実父として、一条東洞院邸に移ることにより、伏見御所にいた頃のように気ままに出歩くことが困難になったと考えられる。後花園天皇との往き来については、絵画鑑賞を主な目的としている。

この比較より、唐絵・障子絵・屏風絵等は、貞成親王の社会的地位の変化よりも、それに伴って変化した日常生活の影響を強く受けているといえる。唐絵・障子絵・屏風絵等が、生活や年中行事に関りの深いものであるから、これらの絵に関する活動に、日常生活の細かい変化を見出だすことができる。唐絵・障子絵・屏風絵等は家具としての機能を持ちながらも、行事の折りに座敷を飾り、贈答品としても喜ばれる絵画である。そこに期待されているものは、生活と絵画を結び付け、身近な所で絵画を鑑賞することである。故にこれらの絵の往き来の範囲が貞成親王の生活圏を出ることはなかったのである。

次に絵巻についてみてゆく。絵巻が唐絵・障子絵・屏風絵等と異なっている点は、貞成親王の社会的地位の変化が大きく影響しており、それに伴って絵巻の往き来の範囲が大きく広がったことである。絵巻は人物Aから人物Bへ動くことを繰り返して、貞成親王の許へ届けられる。この時の絵巻は、人物A、Bと貞成親王を繋ぐ役割を果している。また、絵巻には、七夕や連歌会に用いられる唐絵の様に、特定の行事に必ず用いられているということがない。これも、絵巻が日常生活の変化を直接受けなかった要因のひとつだといえる。絵巻は、貞成親王の美術鑑賞に関する興味

資料(七) 貞成親王を中心とする絵巻の動き



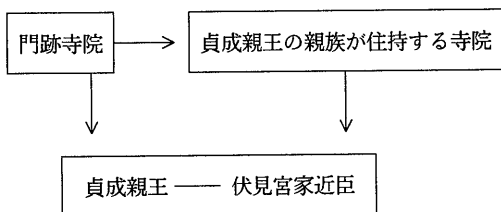
- A = a : 貞成親王に絵巻を提供した者
- B = b : 貞成親王から絵巻を提供された者
- C = c : 絵巻を提供した者と貞成親王の間に立つ者
  - c' : 貞成親王と、貞成親王から絵巻を提供された者の間に立つ者
  - (c) : 貞成親王と制作者の間に立つ者
  - (c)' : 貞成親王と、貞成親王に制作を依頼した者の間に立つ者
- D = d : 貞成親王の絵巻の鑑賞に関する者
  - d' : c で d を兼ねている者
- E = e : 貞成親王の制作に関する者
  - e' : 貞成親王を制作に関らせる者 = 貞成親王に制作を依頼した者
- F = f : その他 (主に絵巻の動きができなかった者)
- S = 貞成親王

を十分に掻き立てるものであった。貞成親王が絵巻を探し求め、やりとりを繰り返した結果、絵巻が貞成親王と絵巻に関つた者を繋ぎ、絵巻による交際の範囲を広げていったのである。

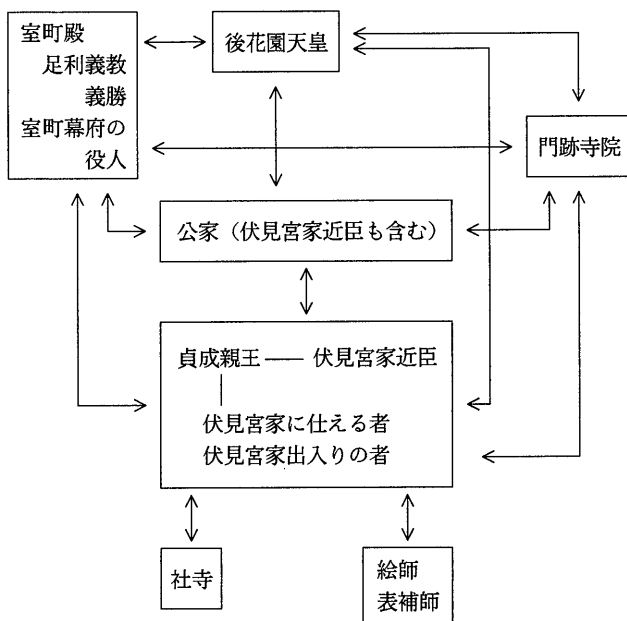
絵巻の動きを表した資料(七)より、間に立つ者の集合Cの役割が大きいことがわかる。c、c'は、絵巻のやりとりで

資料(Ⅳ) 絵巻による貞成親王の交際範囲の広がり

1. 応永23～正長元年



2. 永享元～嘉吉3年



間に立つ者、(c)、(c')は絵巻の制作について間に立つ者である。Fは、AやBになり得る者の意を受けたのだが、絵巻の動きを作ることができなかった者と見ることが出来る。Dのd'は、cでありながらdでもある人である。貞成親王の絵巻に関する活動は、C II間に立つ者によって支えられており、Cを窓口にして外へ開かれていたといえる。

資料Aは、貞成親王の絵巻の往き来に、間に立つ者の集合Cが関ることによって、絵巻による交際範囲がどれだけ広がったのか、また、Cの、絵巻の往き来における位置付けを表したものである。

1、応永二十三〜正長元年は後花園天皇の即位の前であり、貞成親王の絵巻による交際範囲は狭い。親族からの提供や伏見宮家に所蔵されているもので賄えている状態である。2、永享元〜嘉吉三年は後花園天皇の即位の後である。1、と比べて、矢印の向きがあちらこちらに行き交っており、絵巻による交際範囲が広がっていることを表している。この矢印の間で、間に立つ者の集合Cが関与している。よって、貞成親王の絵巻による交際範囲の広がり、集合Cの存在抜きでは考えることができないといえる。

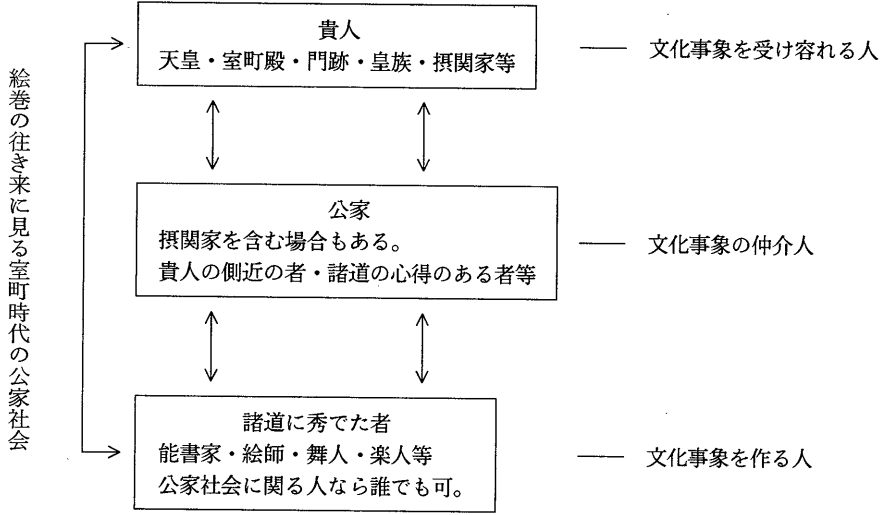
更に、2、で注目すべきものは公家である。公家は、後花園天皇・貞成親王・足利義政・門跡といった、貴人にあたる人々と接触を持つことができる立場にある。2、の矢印は間に立つ者の集合Cを表すので、公家はこの中にも含まれている。従って、公家は、貞成親王に絵巻を提供した者、貞成親王から絵巻を提供された者、間に立つ者、貞成親王の鑑賞に関する者、貞成親王の制作に関する者、その他の者、の何れにもなり得る人々の集まりだといえる。そして、公家の中での家格や官職、貞成親王との関係などから、六つの役割のうち、誰が何れに適するかが決まり、同一人物でも接する相手が異なると役が替わるのである。<sup>(51)</sup>貞成親王の絵巻に関する活動は、これらの役にあたる公家によって支えられているといえる。

資料(七)より、貞成親王を中心としてみた絵巻に関する活動は、貞成親王の意を受けた伏見宮家関係者があちらこちらから集めて来て、貞成親王の許へ届くという形になる。また、資料(八)より、公家社会の中から貞成親王の絵巻に関する活動を見ると、活動の中心は公家であり、彼らが時と場合にに応じて役を使い分けている。この二つのことは、資料(七)のような形態を持つ貴人たちを繋いで、大きなひとつの公家社会を作る役目を負っているのが公家であることを表している。公家社会を貴人の間におけるものの動きの面で捉えると、貴人の意を承けて動く人々（主に公家）で繋がれている社会だといえる。貞成親王の絵巻に関する活動は、絵巻の動きの面で、公家社会をひとつに繋ぐ役割を果たしているのである。

絵巻の往き来から見た室町時代の文化の形成について考えてみる。資料(七)と(八)は、絵巻以外の文化事象や、貞成親王や伏見宮家関係者以外の人々に置き換えることができるのだろうか。資料(七)は、絵巻の動きにはどのような役割を果たす者が関与していたのかを表したものである。ものが動く文化事象については、<sup>(52)</sup>絵巻以外のものに置き換えることが可能ではないかと考えられる。資料(八)は、公家が絵巻に関することにより、公家社会がひとつに繋がっていることを表している。公家は絵巻以外の文化事象でも、自分たちの社会を繋ぐ役割を果たすのか。資料(七)と併せて考えると、ものが動く文化事象に関して公家は、公家社会をひとつに繋ぐ役割を果たしているといっている。よって、資料(七)も、資料(八)を貞成親王について図化したものであるが、ものの動きを伴う文化事象については、他の対象に置き換えることが可能であろう。

ものの動きを伴わない文化事象についてもみてゆく。該当するものとして、歌舞音曲の類をあげることができであろう。この上演の方法にもいくつかあり、演者が推参するもの、鑑賞者が出向いて見るもの、鑑賞者が上演を企

資料(㉒) 公家社会における文化の形成の流れ



画・依頼するもの、内々で興じるもの等がある。『看聞御記』永享七年四月十七日の舞御覧を例にして考えてみる。<sup>(53)</sup>この舞御覧には、足利義教、大炊御門信宗、中御門俊輔、庭田重有、千種具定、舞の奉行である中御門明豊、その他多くの公家たちが、舞御覧を企画・運営する形をとっている。舞楽の上演にも、間に立つ者の集合Cにあたる人々がいたということになる。ものの動きを伴わない文化事象においても、間に立つ者の集合Cは欠かすことのできないものである。

そこでものの動きを伴う文化事象、伴わない文化事象何れも、人が関るといふ点では同じであるということに注目したものが資料(㉒)である。文化事象を人の関りの点から見た場合、文化事象を受け容れる人、個々の文化事象を作る人、文化事象の仲介人、大きくこの三つの立場がある。人が関るといふことは、人が働きかけることを表している。よって、文化事象は人の働きかけを伴うといえる。社会的地位や官職、技能等の条件で限られてくる面はあるものの、この三つの立場は公家社会に関る人であれば誰でもなり得るものである。そして、この積み重ねが

公家社会に文化の充実をもたらすのである。また、文化事象の仲介人を、間に立つ者の集合C、即ち公家と考えると、公家の役割の重要さを改めて知ることができる。この役なしでは、文化事象を受け容れる人と文化事象を作る人の接触は難しいものとなり、公家社会における文化の形成も滞ってしまうのである。

公家社会の文化の形成は、文化人と呼ばれている、ごく一握りの貴人にあたる人々が中心になって進められている様に見える。だが、文化事象を受け容れる人と文化事象を作る人との間に立つ、仲介人の役にあたる公家が事実上の中心である。公家社会における文化の形成は、文化事象の仲介人としての公家を間に挟んで、文化事象を受け容れる人（主に貴人）と文化事象を作る人（芸術や芸能に秀でた者）とが繋がることを繰り返しながら、進んでゆくのである。

### 結びにかえて

貞成親王の関った絵巻、貞成親王と絵巻に関った人々についての考察を行い、その結果に基づいて、室町時代の公家社会における文化の形成過程についての見解を述べてきた。

「一、貞成親王の関った絵巻について」では、社寺縁起類・高僧伝類・御伽草子類の絵巻が、貞成親王の許に多く集まってくる点について追求することができなかった。この当時の公家が持っていた宗教についての考えが、社寺縁起類・高僧伝類の絵巻の存在を必要としていたのであり、これらの絵巻の制作や鑑賞の隆盛に繋がるのであろう。その宗教についての考えがどの様なものであったのか。この点からの分析を行うと、室町時代の公家の宗教と芸術の接

点が明らかにされるであろう。御伽草子類の絵巻についても、個々の作品の中に込められている当時の日本人のものの見方等から、公家社会に受け入れられる素地を見出だすことができるのではないだろうか。この様な点を明らかにしてゆけば、貞成親王の許に幾つかの種類の絵巻が多く集まってきたことについて、室町時代の公家の精神面を踏まえたうえで、の解明ができると思う。

「二、貞成親王と絵巻に関った人々」では、取り上げた人々の大まかな動きを追うのが精一杯であった。それぞれの人について貞成親王、社寺、室町幕府との関係を充分把握したうえで、分析を行うことができなかった。これを深く追求してゆくと、貞成親王との新しい繋がりを見つけることもできるであろう。また、社寺との関りについては、社寺と芸術について考えるうえでも無視することができない。室町幕府との関りは当時の朝幕関係を考える際に見遇ごすことのできないものである。これらの点について更に細かく見てゆくと、絵巻を媒体として繋がっている公家社会の実態が、一層はつきりと見えてくるであろう。

「三、公家社会における文化の形成過程」では、貞成親王という貴人の眼から見たものを通して、室町時代の公家社会と文化についての仮説を立てた。文化事象、時代、人物、立場が異なっても同じことを導きだすことができるのか。この点が問題として残されている。

以上、本稿を振り返って二、三の点について述べた。それらを踏まえたうえでの将来的な展望として、公家社会における文化を、政治や経済との関係を交えて論じる方向へと視野を広げてゆきたいと思っている。



註

(1) 下房俊一「伏見宮貞成」(『国語国文』三七—一四—一九六八・一一)、横井清『看聞御記「王者」と「衆庶」のはざまにて』(そして 一九七九)、村田正志『村田正志著作集第2巻 統南北朝史論』(思文閣 一九八三)「第二章 動乱の世の人々の事蹟 第六節 後小松天皇の御遺詔 第七節 伏見宮栄仁親王の二王子に関する史実」。

(2) 文化の活動全体については、註1横井清前掲書、それぞれの文化事象については、本文で挙げた順に、市野千鶴子「伏見御所周辺の生活文化——看聞日記にみる——」(『書陵部紀要』第三三号 宮内庁書陵部 一九八一)、村井康彦「中世聞茶の方法——茶勝負記録について」(『日本史研究』三三—一九五七・九)、註1下房俊一前掲論文、伊藤敬「新北朝の人と文学」(三弥井書店 一九七九)「菊葉和歌集」考、八嶋正治「後崇光院詠草を巡って」(『書陵部紀要』第三一号 宮内庁書陵部 一九七九)、位藤邦生「伏見宮貞成の文学」(清文堂 一九九一)、木内一夫「看聞御記に見えたる松柏——その様態と当代猿蓑——」(『国学院雑誌』七二—五 一九七一・五)、同「看聞御記に見えたる地藏語・念仏囉と風流」(『国学院雑誌』七六—五 一九七五・五)。

(3) 文物の動きに注目した研究として、松園齊「室町時代の天皇家について——『日記の家』の視点から——」(『年報中世史研究』第一八号 一九九三)がある。この研究では『看聞御記』中の文物の動きから、伏見宮家がひとつの宮家として安定する過程を論じている。

(4) 『看聞御記』は『統群書類従』補遺二、『康富記』は『史料大成』を用いた。尚、本文や註、資料で史料引用等を行う際、史料名を特に記していなくても、嘉吉二、文安元、宝徳元年のものは『康富記』、それ以外の年のものは『看聞御記』である。

(5) 註1横井清前掲書、註2市野千鶴子前掲論文。

(6) 資料(一)には、応永三十二年十一月四日「常磐絵 二篇」とある。詞書を伴っていることより、絵巻の可能性も残されていると思われるので、一応、ここに含めておく。尚、「絵巻」の名称に関する論考として、中村義雄「絵巻物詞書の研究」(角川書店 一九八二)「第十章 絵巻物攷——『絵巻物』という呼称について——」がある。

(7) 椎野(椎野寺主)Ⅱ貞成親王の異母弟、真乗寺殿(真乗寺・景愛寺主)Ⅱ貞成親王の叔母、瑞室。

(8) 奥平英雄『絵巻物再見』(角川書店 一九八七)「第三章 分類」で行われている分類に従った。

(9) 石原美紀「物語と絵画——白描伊勢物語絵巻における伊勢物語享受——」(『国文学』六六 関西大学国文学会 一九八九

- (10) この三点の絵巻については、梅津次郎「吉備大臣絵をめぐる覚え書き——若狭所伝の三つの絵巻——」(『美術研究』二二三  
五 一九六五・三)、小松茂美『彦火々出見尊絵巻の研究』(東京美術 一九七四)、同『日本絵巻聚稿 上』(中央公論社  
一九八九)に詳しい。
- (11) 『看聞御記』嘉吉三年四月九日条。
- (12) 註1横井清前掲書、村田正志前掲書。
- (13) 註1横井清前掲書、註2市野千鶴子前掲論文。
- (14) 青蓮院の所持が明らかなものは、永享九年八月十八日の「慈恵大師絵」のみであるが、永享十年六月十七日の「東大寺絵」  
「二月堂絵」「児方芸絵」を伏見官家へ持参したのが、青蓮院の僧法輪院心勝律師なので、この絵巻も青蓮院の所持の可能  
性がある。
- (15) 嘉吉三年—足利義勝十歳。
- (16) 興福寺と絵画については、森末義彰『中世の社寺と芸術』(吉川弘文館 一九八三復刊)「第二部 社寺と美術関係の座」  
に詳しい。
- (17) 永享十年二月二十七日「春日御縁起中書」・同年十一月十三日「強力女絵」「ういのせう絵」「香助絵」——鳴滝殿鳴  
滝殿十地院智観(貞成親王の姪)  
嘉吉元年四月十四日「狂言絵」——今出川教季今出川公直(貞成親王の養父)の玄孫
- (18) 後花園天皇の書については、『特別展覧会 かなの美』(京都国立博物館 一九九二)に掲載されている、「一二五 源  
氏物語抄」、「一二六 源氏物語抄」、「一七〇 後花園天皇宸翰女房奉書」がある。絵については、『看聞御記』永享九年二  
月二十五日の「足引絵」の絵を全五巻写したことに對する貞成親王の評として、「絵本不相替殊勝ニ被写之條。天性之御器  
用不可説也。花園院御絵抜群御事也。代々御絵遡返事也。而如比被遊之條。御教奇感悦無極。」とある。
- (19) 嘉吉三年四月十一日「香助絵」「鐘撞法師」「楚波丞絵」は「先日絵御還礼ニ進之。」とある。
- (20) 法安寺、五辻持経、法輪院、庭田重賢、綾小路有俊。
- (21) 「御伽草子」(『国文学 解釈と鑑賞』五一—四 一九八六・四)。
- (22) 註1横井清前掲書「夏 六 遊興の席」、註2位藤邦生前掲書「第三章 伏見宮運歌会」。
- (23) 註2市野千鶴子前掲論文。『看聞御記』では特に関りの深い伏見官家関係者を表す表現として用いられている。

(24) 貞成親王の絵巻の制作に関する研究として、齊藤昌利「『看聞御記』にみる絵巻制作について」(『日本絵画史の研究』吉川弘文館 一九八九)がある。

(25) 永享九年二月二十五日、三十日、同十年五月二十六日等。

(26) 註18。

(27) 註18。

(28) 永享十年七月四日「足利絵」(利は引と思われる)

第四卷詞中書持経朝臣令書。是公知朝臣可清書之間。絵正本可被遣事。六借之間。以中書可被遣云々。誰ニても中書之由被仰下之間。彼朝臣ニ令書。

(29) 註18前掲書「一六九 貞成親王消息」。

(30) 「女嬃三蔵絵」嘉吉元年四月十七日、「稻荷縁起絵」嘉吉三年四月十日。

(31) 相澤正彦「粟田口隆光をめぐる一、二の問題について」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊第八集』一九八一)、同「粟田口絵師考(上)(下)」(『古美術』八三、八四 一九八七・七、一〇)。

(32) 谷信一「土佐行広考 上・下」(『美術研究』十一―七 一九四二、十二―一 一九四三)、宮島新一「土佐光信と土佐派の系譜」(『日本の美術』二四七 至文堂 一九八六・一二)では永享一〇年から嘉吉三年の「土佐将監」を土佐行広とは別人だとしているが、ここでは『国史大辞典』「とさゆきひろ」の記述に従うことにする。

(33) 註24齊藤昌利前掲論文。

(34) 長祿元(一四五七)年正三位(『公卿補任』)。

(35) 註31前掲論文。

(36) 永享十年七月二十二日「足引絵」。

(37) 清賢について永享四年九月六日「年中行事絵」に「承仕清賢有絵骨之間令亨了。」とある。

(38) 嘉吉三年九月十九日に「照善中山法師絵窪田採色出来持参。不思議之間又返。能々可採色之由仰。」とある。

(39) 永享七年十二月五日。

(40) 永享十年五月二十五日、二十七日、六月二日、二十一日、二十七日、七月二日、二十一日、二十九日、十月七日。

(41) 洞院実熙——永享五年六月十四日、一条兼良——嘉吉元年五月七日。

- (42) 『康富記』嘉吉二年六月十一日、十一月二十六日、二十八日、十二月一日、二十三日。
- (43) 連歌会——応永二十六年六月十五日、同二十九年六月二十五日、同三十年二月二十五日等。七夕飾——応永二十三年七月七日、同二十五年七月七日、同二十七年七月七日等。
- (44) 永享八年六月十八日「感陽宮」、同二十二年「人麿影像」、同二十七日「内裏御絵 観音・蘆・鴈」等。
- (45) 応永二十三年十月二十七日「行藏庵押板障子絵」、同二十六年二月一日「女超新造庵障子絵」、同二十七年五月六日「松林庵障子絵」等。
- (46) 借りてきて飾ったものは、永享四年七月六日「住心院僧正屏風一雙絵三幅」「法輪院律師屏風一雙」、同五年七月六日「慈濟院絵五幅」「南禅寺屏風二雙絵十幅」、同七年七月六日「内裏御屏風二双」。
- (47) 応永二十三年八月三日「唐絵一幅」(御室への御憑として)、同年十二月三十日「唐絵一幅」(寺長老が持参する)、同二十四年一月十四日「唐絵一对」(引物として)、同年六月五日「唐絵二幅」(葆光院の形見として)、同二十九年二月二十三日「絵二幅」(旧友の法師に)、同三十年十一月二十八日「絵二幅」(餞別として)、永享四年一月二十八日「唐絵二幅」(椎野より給う)。
- (48) 伏見宮家関係者以外では、応永二十年八月三日「唐絵一幅」(御室)、永享五年七月五日「絵屏風等」(南禅寺)、同十年四月一、二日「唐絵一雙」(二條殿Ⅱ二條持基か)、この三例がある。
- (49) 永享四年以降、貞成親王が出向いて唐絵・障子絵・屏風絵等を見た記事は見られない。
- (50) 註44。
- (51) 貞成親王や後花園天皇が、時と場合にに応じて役割を替えていること、世尊寺行豊が鑑賞と制作に関っていること等からも明らかである。
- (52) 「はじめに」でも述べた様に、絵巻や唐絵などの絵画、物語や歌集、漢籍、記録類等の書籍、楽器等の様に移動や貸し借りの可能なものとしておく。なお、この点に注目した先行研究として、註3松園斉前掲論文がある。
- (53) 永享七年四月二、四、七、八、九、十一、十四、十五、十六、十七、十八、十九日。